

研究課題名	家畜伝染病発生農場における封じ込め措置完了後の速やかな堆肥化技術の検討		
予算区分	県単 (1,108千円)	担 当	経営技術研究室 環境研究グループ
研究期間	新規 (令和4年度～6年度)	協力関係	—
研究目的	<p>高病原性鳥インフルエンザ（以下、HPAI）の防疫指針等では、汚染物品である家畜排せつ物やその堆肥化物を焼埋却処理できない場合、封じ込め後に60℃以上で発酵消毒することが求められている。同様に、口蹄疫の防疫指針等では、封じ込め後に55℃以上で発酵消毒することが求められている。しかしながら、処理対象物の水分が低すぎると発酵温度が十分に上がらず、経営再開に向けた防疫措置完了の妨げとなる恐れがある。</p> <p>そこで、低水分の鶏ふん等を適切に堆肥化する方法を確立し、HPAI等の発生時に家畜排せつ物及び堆肥化物の処理が円滑に行えるよう備える。</p>		
全体計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 低水分鶏ふん等への加水が発酵温度等におよぼす影響の検討 2 加水をしても発酵温度が上がらない低水分鶏ふん等の発酵消毒技術の確立 		
研究対象	鶏、牛	専門部門	家畜環境
<p>○ 本年度試験のねらい</p> <p>低水分鶏ふん等への加水の方法や加水後の切り返しの頻度の違いが発酵温度等におよぼす影響を把握する。</p> <p>試験1 低水分鶏ふん等への加水が発酵温度等におよぼす影響の検討 (時期) 令和4年4月～令和4年8月 (試験の内容) 容積約10Lの小型堆肥化実験装置を用いて、消石灰で封じ込め措置を行った低水分鶏ふん等への加水の方法や加水後の切り返しの頻度の違いが発酵温度等におよぼす影響を把握する。</p> <p>試験2 加水後に発酵温度が上がらなかった低水分鶏ふん等への発酵助材の混合が発酵温度等におよぼす影響の検討 (時期) 令和4年9月～令和5年2月 (試験の内容) 容積約10Lの小型堆肥化実験装置を用いて、消石灰で封じ込め措置を行った低水分鶏ふん等の発酵温度が上がらない場合の発酵助材の追加混合による発酵温度の改善効果についても検討する。</p> <p>○ 既往の関連成果</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 消石灰を2.0kg/m²使用して封じ込めを行った採卵鶏ふんまたは肥育牛ふんを水分60%程度に調整して堆肥化したところ、消石灰を散布しなかった場合と遜色のない発酵温度が得られた。(岡山畜研, 2019) 2 過乾燥牛ふん堆肥の再堆肥化にあたって、水分40%となるように加水した場合には十分な発酵温度が得られなかったが、50%とすることで、再堆肥化時の発酵温度を確保しつつ再堆肥化時のアンモニアガスの発生を抑制できた。(岡山畜研, 未発表) <p>○ 協力関係 なし</p>			